良心とメディアリテラシーが問われる世界でAIとどう付き合うのか

香川県立高松高等学校3年　北川　裕樹

1. はじめに

AI は、近年ますます注目を集め、様々な分野で活用されています。例えば、ビジネス分野では、AI を活用したビジネスプロセスの最適化や、顧客とのコミュニケーション改善が行われています。また、製造現場では、AI を活用して生産計画や品質管理が行われ、生産性の向上に繋がっています。医療分野では、AI を利用して医療診断の正確性や早期発見、医療費の削減に繋がる研究が進んでいます。今後も、AI を活用したシステムの導入や開発が進み、様々な分野で効率化や革新が進んでいくことが期待されています。しかしながら、AI の利用に伴い新たな倫理的、社会的課題が浮上する可能性もあり、その対策も必要になります。本小論文では、AI の活用法と課題について考察し、その将来性を探ります。

上の文章は、ラインの公式アカウント「AIチャットくん」に200語程度でAIの活用法についての小論文の序論を書かせてみたものである。200語を指定したにも関わらず300語程度になっている点は残念だが、AI が書いたとは言われなければ気が付かないであろう。この文章を生成するのに AI が要したのはたった 10 秒足らず、とても便利な世の中になったものである。その一方でAIに関して新たな問題が生じていることも事実である。本文では、実例を挙げつつAIの活用法や留意すべき点について提案していきたいと思う。

2. 生成AIと著作権

生成AIに関する1つ目の問題は、著作権の問題である。著作権の問題と一言で言ってもこの問題は 2 つの側面を持っている。1 つは、AI が製作したものの著作権はどこに帰属するのか、もう1つは、他人の著作物を勝手に人工知能に学習させてもいいのか、という問題である。1つ目の問題に対して文化庁は、AIの発達は目覚ましいものがあり現時点では判断できないとしている。私も同意見である。2つ目の問題は、AI開発において大量の学習データが必要とされるなかで、研究開発を推し進めていくためにはっきりと定義されてこなかった部分である。研究のための利用となると、著作者側も納得の行く部分もあり今までは見逃されてきたが、生成AIを一般の人が簡単に使うことができる現在、見直していかなければならない部分である。

今回は画像生成 AI に関して特に言及していきたいと思う。画像生成 AI に特定の一人の人物の写真を学習させたり、イラストレーターの描いた絵を学習させたりすると、AI は人物の特徴やイラストレーターの画風を学習し、本物そっくりの画像を生成することができるのである。前者は、肖像権やパブリシティ権といった法律に明確に抵触するため取り締まることができると思われるが、後者は、現状難しい状況にある。文化庁によると、画風とい

うのは「アイディア」に分類され著作権では保護されないそうなのである。例えば、印象派の画家達の筆のタッチが残る画風の影響を受けて、ポスト印象派のゴッホは自身の画風を確立していった。もし、画風という「アイディア」にまで保護対象にしてしまうと、このような後発の新たな表現活動を妨げてしまう恐れがあると言うのがその理由である。確かにいいと思った他の人の画風に影響を受けて、模写を繰り返す等して自分の技術に昇華する行為はとても素晴らしいことだと思う。あくまで全く同じ画風ではないし、その画風になるまでに自分なりの試行錯誤があると思うからだ。しかし、イラストレーターが長い時間をかけて築き上げた画風を AI に盗ませる行為を同列に扱ってもいいのだろうか。私はそうは思わない。イラストレーターの refeia さんは多くの絵師が自身のイラストを生成 AI の学習に活用してほしくないと答えると思うと言っていて、実際悪用されて悲しんでいるイラストレーターの方の数も増えてきている。まだ法整備が進んでいない分野だからこそ、大衆の良心が問われているように思う。イラストレーター、ひいてはアーティストという職業を守るために、好きなアーティスト本人の作品を楽しむべきである。

その一方で、事業の中でイラストが必要となったときに AI が活躍する機会は増えるだろうと、refeia さんは言っている。イラストが必要というシンプルな需要に対して、安く早く応えてくれる。線画だけを描いて、色塗りを AI に任せるだけでもかなり楽になるだろう。ネックとなる著作権の問題も、法的にクリアなサービスが出始めている。また、AI の絵が上手なのも事実である。将棋や囲碁の世界で、プロ棋士が AI の指す手を研究するように、イラストの描き方を AI から学ぶ時代が来るのかもしれない。

3. 生成 AI と情報の信憑性

生成 AI に関する 2 つ目の問題は、情報の信憑性の問題である。この問題も 2 つの側面がある。1 つ目は、生成 AI を用いたフェイクニュースを見抜くのが非常に困難であるという点である。2023 年 5 月 22 日、アメリカ防衛省ペンタゴン近くで爆発が起きたというフェイクニュースが、下記の画像生成 AI によって作られた画像とともに SNS で拡散され、アメリカニューヨーク株式市場では主要株で構成するダウ工業株 30 種平均が一時 80 ドル近く急落するなど混乱が広がった。

以前の世の中において、写真や画像といったものはとても証拠能力が高く情報の信憑性を高めるものであった。しかし、AI を用いて簡単に上記の画像のような質の画像が作れる現代においては、単に写真があるからといって、すぐにその情報が信用に足るものだと断定してはもはやいけなくなってしまった。もちろん今までも、ネット上には悪意のある切り取り方をした写真が上がっていたが、これまで以上にその情報のソースが信用に足るのかどうか、複数の情報を参照する必要があるだろう。

2 つ目は、AI にあるテーマで文章を書かせたとき、書かれた内容が必ずしも正しいわけではないということである。ChatGPT に東京大学の世界史の問題の論述を書かせたところ、いかにも人が書きそうな文章を書いたが、歴史上の事実とは 1 つも一致しておらず、0 点の回答を作り上げた。最近では、情報を検索することにグーグルやヤフーといった検索エンジンではなく、ChatGPT 等の AI を頼る人も出始めているが、生成 AI はまだまだ事実を正確に出力することにおいては未熟である。また、どのようなエビデンスを元にその出力結果に至ったのかも不透明なため、事実確認が困難を極める場合もある。確かに AI は便利だが、AI は私達より多くの情報を知っているのだから正しいに違いないと簡単に信頼していいものでもない。

4. AI との付き合い方

ここまで AI の問題点ばかりに触れてきたが、AI がとても便利な道具であることもまた事実である。これからの世界を生きていく中で、AI とは必ず付き合い続けることになるだろう。例えば、ウェブページをデザインしたければ、今までなら複数のプログラミング言語を学習して使いこなせなければならないというハードルがあった。しかし、今はプログラムを書く過程は AI に丸投げすることが可能になった。これ以外の分野でも、様々なことに取り組む技能面でのハードルが下がったと思う。また、前述したように、AI のほうが優れている分野において、ひとがそれを見習っていく必要も生まれていくのかもしれない。

このように、AI は正しく付き合っていけば便利な一方で、悪用することも前述してきたように簡単である。AI とこれからうまく付き合っていくためには、良心とメディアリテラシーがやはり重要であると思う。まず大前提として自分たちが AI を悪用してはいけない。自分の良心に常に従って AI を使ってほしい。また、悪用している人の言っていることを鵜呑みにしたり、知らないうちに自分が悪用している人の側になったりしないためにも、今まで以上にメディアリテラシーが重要になってくると思う。ただ AI を恐れるのでも、盲信するのでもなく、正しい知識を持って AI と付き合っていける人が多い世の中になってほしい。

参考文献

AIsmily　AI・人工知能の導入によって生まれるメリット・デメリットや問題点
https://aismiley.co.jp/ai_news/what-are-the-disadvantages-of-introducing-ai-and-artificial-intelligence/
東洋経済オンライン　「ChatGPT」に浮かれる人が知らない恐ろしい未来
https://toyokeizai.net/articles/-/656682?page=2
毎日新聞　2023/5/23　「ペンタゴン近くで爆発」フェイク画像拡散、AI か　アメリカ騒然
https://mainichi.jp/articles/20230523/k00/00m/030/018000c
文化庁著作権課　令和 5 年度著作権セミナー「AI と著作権」
https://www.bunka.go.jp/seisaku/chosakuken/pdf/93903601_01.pdf
IT media プロイラストレーターが最近の AI「どうすんだこれ感」について思ったこと
https://www.itmedia.co.jp/pcuser/articles/2303/29/news040.html